

まず、第六号 55 から 79 までをまとめてみたい。

「ここは、この世を創めたところの屋敷であり、教祖は人間を生み出した元々の親である。月日親神はそれを見澄まして天より降りて、万事を教えようとしているのである (55～56)。

月日が真に思うには、それぞれ「つとめ」の役を担うべき人材を貰い受けたなら、それからは神の思うままに何時なりともその胸中を話してやりたいと思っている。しかし、これまで月日の「やしろ」として教祖を確かに貰い受けてはいるが、いまだこの道は滞りがちである (57～59)。

そこで、この度は確かに表へ現れて万事を論そう。今までは、言ってみれば御簾の内にいたからどのような事も眼には見えなかったが、この度は赤衣を召して明るいところへ出たから、どのような事もすぐに見えてくる。この赤い着物を何とと思っているか。その内には月日親神が籠っている (60～63)。

今までも月日の心に応じた理の世界であったが、時機が来なかったので何事も見許してきた。しかし、もう十分に時節も到来し、すべて月日の理のままにしていく。権威ある者はそれを知らずに、何を思って勝手きままにしているのであろうか (64～66)。

何事をするにしても、教祖には人間の心は全くない。どのような事をいっても、筆先に記しても、それはすべて月日の心から示していることばかりである。それに対して、上流にいる人々は何をしてもすべて人間の心からである。月日より授けた神名を取り払うことへのこの残念をなんとと思っていることか。この残念は容易なことではないと思えよ (67～70)。

今までは上の者たちは「俺は高い山にいる」と威張ってきたが、これからは月日が代わってその理のままにしていく。何でもよい、できるなら真似をしてみよ。教祖が何をいっても何をしても、すべて月日の心からしていることである (71～74)。

これからは、月日の心に積もるこのもどかしさを晴らしていく。つまり、これからどのような“ほこり”が立ってそれぞれの身の上の障りとなって現れても、それを決して病と思うな。これまでの山のように積もるこのもどかしさを報いていく。今までもそういっても、皆の者は何の事だと思っていたが、報いるとは、まさにそうしてそれぞれのほこりを身の上に障りとして現していくということで、上流にいるものは皆これを承知していよ (75～79)。」

第六号のこの箇所では、教祖が「月日のやしろ」であることをいっそう明らかにされている。月日のやしろとは平たく言えば「親神の在るところ」で、中山みきという女性の言うことや行いのすべてが親神の思いに根差しているということである。ただし、それは教祖が親神の心をその身でもって「体現」しているというより、教祖の心がそのまま親神の心を現すという意味でその親心を「心現」しているといえよう。これは微妙な違いだが、親神と教祖の関係を理解する上で大事な点であると思われる。

まず、親神が教祖を通じてその心（働き）をこの世界に体現しているという意味で、体現の主体は親神である。そこで、教祖が何か不思議な働きを現されたと見える場合、その主体は教祖ではなく親神である。しばしば人だすけの主は親神であると論されるが、それはこのような事情を述べているのだと思われる

。と同時に、教祖が月日のやしろとして親神の心を現しており、その意味で教祖は「心現」の主体である。「おふでさき」の言葉でいえば、「口は月日がみな借りて」で、その口でもって親神の心を体現し、「心は月日みな貸している」で、その借りた心を教祖が「心現」している。

そこで、「ひながたを辿る」というのは、私たちが何かを体現する、たとえば不思議な働きを現すことではないのだろうか。それは教祖も（主体としては）されていない。むしろひながたを辿る者の主体性は、教祖のようにどんな状況であっても親神の心を現すことにあるといえる。心を現すとは、「勇む」や「陽気」と表現されるようにそれは受動的・静的なものではなく、教祖のひながたのようにおのずと人だすけに向かうような心を現すことである。

また、この観点からいえば、「存命の理」というのは、教祖が人としての姿を隠された後も親神の心をこの世界に現しつけられて（つまり「心現」の場としてこの世界に留まられて）、親神がその親心を中山みきが存命の頃と同様に体現されるのだといえる。つまり、存命の理は、その姿の有無に関係なく、教祖が親神の心を現していることそのものであり、お姿のある存命の頃から引き続いていく教祖の理（心の働き）であると考えられる。

ただし、お姿が見えなくなった後もその「心現」の目に見えたとしして赤衣は遺されている。63で「この赤い着物を何とと思っているか。その内には月日親神が籠っている」と歌われているように、赤は月日を象徴し、教祖が赤衣を召されたのはご自身が月日のやしろ（親神の在るところ）であることをいっそう明らかにする為であった。その事実を人間が忘れないように今日でも赤衣が祀られて、その証拠の一つとして赤衣の一部から作られる「証拠守り」が広く下付されている。

さて、このような存命の理は、「つとめ」と深く関わっている。というのも、それまで教祖中山みきを通じてなされてきた神の心・働きを、お姿を隠して後はよふぼくが勤める「つとめ」を通じて体現していくといえるからだ。言うなれば、これからは親神が存命の理（教祖による親神の「心現」）を体現できるように、よふぼくが「つとめ」を勤めることで世界をたすけていくのである。したがって、陰暦正月二十六日に教祖が115歳の定命を25年も縮められてお姿を隠されたのは、中山みきの身体に集中する人々（側近の者も警察も）の懸念を払拭して、これから存命の理と「つとめ」によって世界をたすけていこうとされる門出でもあったと解される。それが「扉を開く」ことの意味であろう。さらには、親神の働きは個別적으로는「きづけ」によっても広く体現されるようになった。

ただし、ひながたを辿ることと同様に、よふぼくの主体性はつとめによって不思議な働きを現すこと（体現）に求められるのではなく、むしろ、つとめを勤める上でその親心の「心現」の主体になることであると思われる。先にも述べたように体現の主体はあくまで親神であり、その担い手である我々の主体性はみずからの心に親心の現すことにこそ求められよう。みずからの責任においてみずからの心の成人を果たそうとすることこそが、よふぼくのよふぼくたる所以であると思われる。